

2023 年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」選考経過と選考結果

2023 年度の「若手研究者奨励賞」の選考過程と選考結果をご報告申し上げます。21 件の応募があり、4 名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の 8 名を受賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に講評をいただきましたので、あわせてご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 山下 玲子

受賞者（五十音順 所属学年は応募時のもの）

汪 明琛 (おう めいちん)	なぜ戦いは絆を強めるのか？オキシトシンの役割	玉川大学大学院脳科学研究科 修士課程 1 年
川口 周一郎 (かわぐち しゅういちろう)	効果的利他主義の心理的メカニズム：寄付効果の認識と共感に着目して	大阪公立大学 現代システム科学研究科 博士前期課程 1 年
後藤 日奈子 (ごとう ひなこ)	社会的不確実性が向社会的行動の個人差に与える影響	専修大学大学院文学研究科 修士課程 2 年
志水 勇之進 (しみず ゆうのしん)	感情解読の正確さと解読時の視線パターンの関連の検討	愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科 博士前期課程 2 年
下川 詩乃 (しもかわ うな)	意見の表明に金銭的報酬がある状況において、意見分布はどのように変化するのか	関西学院大学社会学研究科 博士課程前期課程 1 年
永延 佳那子 (ながのぶ かなこ)	「先んじて協力を示す」ことの有効性とためらいの日米差	大阪公立大学大学院文学研究科 博士前期課程 1 年
三木 毬菜 (みき まりな)	遠い将来のことを考えると持続可能な選択をとれなくなる？：世代間協力割引仮説	関西学院大学社会学研究科 博士課程前期課程 1 年
山下 美月 (やました みつき)	リーダーシップとフォロワーシップの切り替えを促進する心理的メカニズム	九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻 修士課程 1 年

「選考過程」

1) 募集開始と締め切り

6月26日に募集開始をホームページで告知し、メールニュースでも会員に告知した。締め切りは例年通り9月30日とした。

2) 選考委員選出と一次審査

応募総数21件に対し一次審査を行った。選考委員は応募書類に記載された指導教員を除いて、理事から2名、一般会員から2名に依頼した。

選考委員（敬称略）

理事より：大江朋子（帝京大学）、宮本聡介（明治学院大学）

一般会員より：相馬敏彦（広島大学）、森津太子（放送大学）

審査方法については、従来の手順を踏襲し、この時点では選考委員は互いに匿名で審査をおこなった。各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与するものであった。

3) 第二次審査

第一次審査結果について従来の得点換算方法に従い、A評価を40点、B評価を10点、C評価を5点とし、各応募について合計得点を算出し、その後メールでの審議を行った。最終的に、優れた研究計画が多かったことを踏まえ、8件の応募を受賞対象とすることで合意し、常任理事会と理事会に推薦した。

以上

2023年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評（お名前の五十音順）

大江朋子先生（帝京大学）

面白いと思える研究計画が多く、社会心理学を担う人材の育成が進んでいるという期待を持つことができました。ご応募くださった若手研究者の方々と、日々ご指導にあたってくださっている先生方に感謝いたします。

ほとんどの計画書に、限られたスペースを最大限に活用して明快に説明する工夫、図を挿入して視覚的な理解をうながす工夫がありました。受賞に至った計画書のなかでもより高く評価されたものは、それらの工夫に加え、仮説導出の根拠が明確であり、独創性や実現可能性があると見込めるものでした。他の計画書も、現代社会で新たに発生している課題を調

べようとする、社会問題の解決につなげようとする、多岐にわたる測定から複雑な現象をとらえようとするなどの意欲を感じられるものでした。審査者側はできるだけ多くの若手研究者に受賞してほしいと考えていますので、今回受賞に至らなかった方々は、次年度以降にまたぜひ挑戦してください。

相馬敏彦先生（広島大学）

応募された計画の多くは、明確な目的と実現可能性を備え、よく練られていました。中でも、最終的に採択された計画は、社会心理学研究として何らかの形で「社会」に言及し、それを研究計画に組み込んでいる点で印象的でした。加えて、それらの計画は、研究の波及効果についても、多かれ少なかれ議論を展開しており、社会心理学、あるいは他領域や実務への影響についても考慮されていました。

このような長所を、わずか 2 枚の限られた申請書に盛り込むのは容易ではなかったでしょう。しかし、採択された計画は、限られた紙幅の中で、その意義を簡潔に伝えることに成功しており、計画内容の質の高さはもちろん、その伝え方も巧みであったと思います。今後の応募者の皆さんには、事前に他者にチェックしてもらおうといったやり方で、ぜひ伝え方・伝わり方という点でも推敲を重ねることをお勧めします。

宮本聡介先生（明治学院大学）

応募書類に目を通していると、テーマ、研究手法、統計解析手法の新規さ斬新さに自然と注意が向いてしまいます。いずれの研究も、昭和生まれの私からすると、当時では思いつかないような研究アイデアが詰め込まれており、評価に苦勞しました。評価結果の一覧を鳥瞰すると、今回授賞対象となった研究と残念ながら授賞に至らなかった研究とは僅差であり、後者の研究についても今後十分に期待できるアイデアが多くあったと思います。心理学の伝統的な手法を用いた正攻法な研究アイデアは、これまでも、そしてこれからも必要な視点ではあります。しかし、もし僅差による白黒に理由があったとすると、今回の応募内容のなかでは、どちらかという斬新新規な視点・手法を取り入れた研究アイデアの方に高い評価が与えられたのではないかと感じています。斬新新規な視点の研究には、心理学とは別のスキルを磨くことが求められる印象があります。

若い研究者の皆さんには多くのことにチャレンジしていただきたいと思います。今後の研究成果を楽しみにしています。

森津太子先生（放送大学）

研究者のスタートラインに立っている皆さんの熱意に溢れた研究計画を、自身のウン十年前を振り返りながら評価しました。当時と比べると研究領域は細分化し、同じ社会心理学でも、少しテーマが離れるとついていけないほど専門的な知識が必要になりました。一方で手法の幅も格段に広がったため、研究者として身を立てるには、その技術を習得しておかな

ければなりません。これが若いうちから求められるわけですから、大変な時代になったものだと思います。

応募された研究計画は、いずれも確かな知識と技術に裏打ちされた甲乙つけがたいものでした。そのなかで、当人の目的意識が明確で、かつそこに個性が感じられるもの、また目的に沿った手法が、たとえ面倒なものでも労を惜しむことなく選択されているものに高い評価をしました。しかしこのような基準を設けてもなお、魅力的な研究ばかりでした。採択、不採択に関係なく、今後の展開を見守っていきたいと思います。

以上